

Title	上野の戦争中の英書購読の評判
Sub Title	
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.26, No.1/2 (1952. 12) ,p.142- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19521200-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

掩ふものではないがより廣い經濟的社會的諸現象の理解への一道程として極めて重要な意味を持つてあらう。

尙 Philip Grierson による英譯 Feudalism. (1952. Longmans,

Green and Co.) が發行されてゐる。これを特にこの英譯書によせた序文に於いて原著者はその後の誤りを訂正したもので原本の第三版と見て欲しいと言つてゐる。(森岡敬一郎)

上野の戰爭中の英書講讀の評判

福澤諭吉が慶應義塾を語る際特に自ら誇りとしたものの一つに、維新の變亂の際も學問の命脈を絶やさず、勉學を續けたと云ふ事である。この事は福翁自傳に、

明治元年の五月、上野に大戰爭が始まつて、其前後は江戸市中の芝居も寄席も見世物も料理茶屋も皆休んで仕舞て、八百八町は眞の闇、何が何やら分らない程の混亂なれども、私は其戰爭の日も塾の課業を罷めない。上野ではどん／＼鐵砲を打て居る、けれども上野と新錢座とは線里も離れて居て、鐵砲玉の飛で來る氣遣はないと云ふので、丁度あの時私は英書で經濟の講釋をして居ました。徳川の學校は勿論潰れて仕舞ひ、其教師さへも行衛が分らぬ位、況して維新政府は學校どころの場合でない。日本國中苟も書を讀で……居る處は唯慶應義塾ばかりと云ふ有様で此慶應義塾は日本の洋學の爲めには和蘭の出島と同様、世の中に如何なる變動があつても未だ

會て洋學の命脈を斷やしたことはないぞよ、慶應義塾は一日も休業したことはない此塾のあらん限り大日本は世界の文明國である。

と記して居る。此の事は福澤が折に觸れ學生を勵ます時に引用して語つたものであらう。その爲に此の一事は學生の間は勿論世間でも相當知られて居たのではあるまいかと思はれる。即ち明治十四年二月に發刊された野崎城雄著「今代名士品評初編」の中に福澤を評して居るが、野崎はこの事を

彰義隊士ノ上野ニ據リ王師ニ抗スルノ日都下ノ士民三百年來ノ太平ニ慣レ曾テ戰ヲ見ザルガ故ニ此變ヲ聞テ大ニ驚キ老幼婦女輩ハ無論壯夫ト雖トモ皆畏怯戰慄先ヲ爭テ逃奔シ滿城轟々鼎沸ノ如シ先生此時家塾ニ在リテ英書ヲ講ゼントス忽然砲響耳ヲ貫キ兵火天ニ漲ギレリ先生毫モ驚クノ色ナク生徒ヲ制シテ其書ノ講義ヲ了レリト
と記して居る。明治十四年頃既にウェーランド經濟書講議の一事が有名であつたことを示す一例であらう。(河北展生)